

## (2)大豆の大型カメムシ類

令和7年8月、道央地域及び道南地域の大豆ほ場でカメムシ類による加害が多数確認された。発生虫種はほ場によって異なるものの、ホソヘリカメムシ、クサギカメムシ、ブチヒゲカメムシの大型カメムシが優占した。これまで大豆子実を加害するカメムシ種はエゾアオカメムシやナカグロカスミカメが主体であったが、本年度最も確認事例が多かった種はホソヘリカメムシであり、種構成が異なっていた。発生種の多くが成虫越冬するとされており、本年多発が認められた地域においては今後も発生が多くなると推測される。子実を直接加害するため被害が大きくなる可能性があり、令和8年度の発生に注意する必要がある。

防除に当たっては、雑草地や山林等の越冬地付近で発生が多くなる恐れがあるので注意する。複数種が長期間にわたってほ場で発生するが、いずれの大型カメムシも莢が着き始める頃から莢が黄熟する頃までの子実を加害し、被害程度は加害時期における莢と子実の生育段階で異なるとされるため、防除は大豆の生育に合わせて実施する。道内での薬剤試験事例はないが、「大豆カメムシ類対策マニュアル（農研機構 2020）」では、子実肥大初期（開花 30-40 日後）に 1 回、被害粒率が 20% を超えるような地域では莢伸長後期（開花 20-30 日後）と子実肥大中期（開花 40-50 日後）に 2 回実施するのが効果的とされる。散布後もほ場のカメムシの密度が高い場合は、追加防除を検討する。発生種によって薬剤の感受性が異なる事例もあるため、防除実施後は効果を確認することが重要である。なお、マメシンクイガの防除で使用されるジアミド系剤（IRAC コード：28）はカメムシ類に登録がなく、効果が期待できないので注意する。



写真 左上:大豆葉上のホソヘリカメムシ、右上:クサギカメムシ、下:ブチヒゲカメムシ(道総研 原図)